

翻訳

ソルブの民話 (8)¹

パウル・ネド (編)

大野 寿子 (訳)

34. 名付け親としての死神

男と女がいた。二人にはあまりにも多くの子供がいたため、もう誰も名付け親になりたがらなかった。二人はさらに息子を一人授かった。そこで夫は、名付け親を探しに隣の村へと赴いたが、ひどい雨になったため、一本の松の傍らに立ち尽くした。自身の悪い星回りをひどく嘆き悲しみ、このまま生きているよりはいつそのこと死んでしまおうと思った。すると突然死神²が現れ、「なぜ呼んだのか」と尋ねた。そこで男は、自分の身に起こった事を語った。死神はこう言った。

「ならば私がその子の名付け親になってあげよう。」

男はこう言った。

「あなたさまにぜひお願いしたい。あなたさまはすべてを奪い去る方だ。金持ちであれ貧乏人であれ、誰も容赦はしない方だ。」

子供の洗礼の際に死神は、自ら贈り物を授ける意思を示し、白い小さな石³を一つ与えた。男はその石を、息子が成長するあいだ、状態よく保管しなければならなかった。もしそうしなければ、息子が成人することは決

¹ テキスト：Paul Nedo (Paweł Nedo) : Sorbische Volksmärchen. Systematische Quellenangabe mit Einführung und Anmerkungen. Budyšin-Bautzen (Domowina Verlag) 1956, S. 166-185. パウル・ネド『ソルブの民話—概説と注釈を施した体系的文献一覽』、ドモヴィナ出版社 (パウツェン)、1956年、166-175頁に掲載された第34-36番目の話を訳出する。

² Todは「死」を擬人化したアレゴリーのことであり、西洋においては必ずしも「神」ではないが、「死神」という訳語が定着しているのでここではそれに準ずる。当該箇所にはカッコ書きでsmjerćという、ドイツ語のTodにあたるソルブ語が併記されている。

³ 「石」を意味するドイツ語のSteinにあたる、kamuškというソルブ語が並記されている。

してない定めというのだ。

その息子は大人になるにつれ、万事に精通する賢さを身につけた。結婚をすることになり、名付け親たちをみな結婚式に招いた。もちろん死神もやって来た。さて、死神がかつてその息子に小さな石を贈ったことを父親が語ると、死神がすぐさま息子にこう言った。

「この石でお前はとて金持ちになり、最も偉大な医者になることができる。お前が患者のところへ着いたら、この小さな石を手に取り擦りさえすればいいのだ。すぐさま死神が、患者の傍らに立ち現れよう。死神がベッドの頭の方に立ったなら、その患者は死ぬことになる。もし足元に立ったなら、その患者は救われる。」

そして息子は死神の言った通り、あらゆる国の中で最も偉大な医者になった。それもそのはず、息子は、死神が患者の足元か枕元かに見えるとすぐに、この患者が快復するか死ぬかを言い当てたからだ。

* * *

さて、国王の一人娘が病気になった。国王は、娘に健康を再びもたらした者に、自分の財産の半分を与える約束をした。そこでこの医者が招聘された。この時、息子はもうかなりの金持ちになっていた。息子がやって来ると、死神が頭側に立っているのが見えた。しかし彼は、できればこの王女に健康を与えたいと願った。そこで彼は、もともと足があったところに頭が来るよう、ベッドの向きをぐるりと変えた。死神は怒り、まだ生きているこの医者に襲い掛かり、生きたまま地獄へと連れて行った。そこではこの医者（命の火を灯した）ろうそくが、あとどれくらい生きていられるのかを示していた。医者（命の火を灯した）のろうそくは半分しかなく、王女のろうそくに至っては、今にも燃え尽きようとしていた。死神が言った。

「お前が死ぬ前に、何か自分のためのものを願うがよい。」

すると医者は、自分がもっと長く生きられるよう、ろうそくまるまる一本に、自分のための火を灯すよう死神に求めた。しかし、死神が火を灯そ

うとした時、そのろうそくをひっくり返したため、医者は死んでしまった。もし彼がまだ生き返っていないなら、今日もなお死んだままなのだろう。

〔出典：『伝説、習俗、慣習にみるヴェント人の民族性』（SchVt）、36.〕⁴

35. 悪魔に仕える

昔あるところに、一人の農夫がいた。彼には、ハンスというぐうたら息子が一人いた。父親は多くの事でこの息子に腹を立てるはめになった。ある時父親は、「悪魔のところへでも行ってしまえ！」と言ってハンスを追い出した。彼がまだそんなに遠くへたどり着かないうちに、猟師用の上着をまとった男が突然歩み寄って来て、どこへ行こうとしているのかと尋ねた。ハンスはこう言った。

「ああ、それは僕自身にもわからないんだ。僕の父さんが、僕を悪魔のところへ送っちゃったんでね。」

すると男はこう言った。

「悪魔というのは私の事だ。もしお前が三年間私に奉公すると言うなら、私はお前を（将来）幸せにしてやるぞ。ただし三年の間身体を洗ってはならず、髭や髪や爪を切ってもならない。」

ハンスは少しの間考えこんだ。すると悪魔はこう言った。

「怖がる必要はない。お前には私が付き従うので、楽に生活することができるだろう。」

さて、ハンスの心は決まった。それに応じて悪魔がハンスに金を渡し、旅路へと誘った。ある時、ハンスは一軒の宿屋へとやって来た。そこの亭主がこう言った。

「お前のような奉公中の若造⁵は、この宿には泊められない。」

⁴ W. v. Schulenberg: Wendisches Volksthum in Sage, Brauch und Sitte. Berlin 1882. W・フォン・シューレンブルク『伝説、習俗、慣習にみるヴェント人の民族性』、ベルリン、1882年。SchVtと略記。

するとハンスは亭主に、一晩でいいからいさせてくれと頼んだ。しかし亭主はこう言った。

「いや、それはできない。今日は大きな賭博組織の御一行がやって来る。この方々は嘘偽りない上品な紳士さまなのでね。」

そこでハンスはこう言った。

「僕はとにかく静かに暖炉の後ろに座っておくよ。そこなら僕の事は誰からも見えないだろうから。」

すると亭主はこう言った。

「まあ、それなら構わない。ここにいるがいいさ。」

ハンスは暖炉の裏側へと潜り込んだ。ほどなくして多くの紳士たちがやって来て、カードゲームをするべく席に着いた。ところがその中の一人が、一時間後にはほとんどスッカラカンになってしまった。そして独り言を呟いた。

「これが悪魔の仕業なら、他の奴らもやられてしまえ。」

そしてその男は扉の外へ出た。ハンスは自分のいた暖炉の裏から静かに出てきてその客のあとを追い、こう言った。

「そんなに弱気におなりなさるな。私めがお助けしましょうぞ。」

その男はハンスを見て走り去ろうとした。というのも彼のいで立ちが、かなりボサボサだったからだ。ハンスはしかしこう言った。

「そう馬鹿であられるな。このお金を差し上げましょうぞ。これであなたさまはもう勝ったも同然。」

その男は金を受け取り、部屋へと戻って行った。今やもう、負けた分を

⁵ 若者、若造とも、中世以降の手工業の職人とも訳しうる。ここではWalz（放浪職人）の姿を重ねて解釈することもできるのではないか。ヴァルツとは、三年と一日の間経験を積むべくドイツをはじめ様々な国を訪れ修業する遍歴職人および放浪職人のことで、厳格なマイスター制度のもと、この修業の後に親方の資格を得る。職種によって特定のコスチュームに身を包み、移動は徒歩かヒッチハイクのみ、修行期間中は帰省できないなど厳しい規則がある。三年間の禁止事項を与えられたハンスを、その遍歴状態と重ね合わせることもできよう。

取り戻しただけでなく、他の仲間の金も自分の懐へと入って来ていた。とうとう全員が立ち去ると、ハンスはその男の背後に走り寄り、こう言った。「こうして僕はお前を助けた。今度はお前が僕に、ちょっとしたお礼をしれくれないとね。僕はお前の一番下の娘を妻に迎えたい。」

その男はその申し出にゾツとした。だがしばらくしてこう言った。

「わかりました。あなたに娘を差し上げましょう。一緒に来てください。」

二人が村を出てそこそこ進むと、堂々たる城へとたどり着いた。先の男の城であり、そこに三人の娘といっしょに住んでいた。娘たちは父親と客を見ると走り去ろうとした。そこでハンスはこう言った。

「あなたたちの中の一人を僕の妻に迎えることとなりました。そんなにお逃げなさいますな。」

しかたなく父親は、ハンスの側に来て握手をするよう末の娘を説得した。末娘は恐る恐るハンスに近づき、手を差し出した。しかしハンスはこう言った。

「三週間後に僕はまた来ます。その時が結婚式です。」

ところが三週間後とは、ハンスが悪魔に仕えてきた三年の奉公が明ける日だった。彼は、悪魔が言ったように幸せになることになっていた。しかし姉たちは末の妹をからかい、悪魔の花嫁とののしった。

* * *

さて、三年の月日が過ぎ去る前日、悪魔がぐうたらハンスのところにやって来て、かなりの大金を与えた。さらに二頭の美しい馬につながれた馬車を一台と、魔法の香油（Wunderbalsam）の入った小さな瓶を与えた。そして悪魔はこう言った。

「もう一度私はお前を必要とする。しかもお前の結婚式の日にな。そうしたら、私はもう二度と現れない。」

そして悪魔は姿を消した。翌日ハンスは水浴びをするために、大きな湖の畔へとやって来た。そろそろ結婚式を挙げたかったからだ。途中でハン

スは貧しい羊飼いに会ったので、自分の爪を切り、髭を剃ってくれるよう頼んだ。しかしその羊飼いは、あらん限りの速さで立ち去った。さらにハンスは鍛冶屋に出会い、同じことを頼んだ。鍛冶屋はこう言った。

「さて、こんなことはもう終わりにしようか。どこからどう見ても悪魔の親戚に見えるようなことはな。」

すると彼はハンスを鍛冶場に連れて行き、大きなやつとこ（ペンチ）を手に取り、ハンスの長い悪魔のようなカギ爪を摘み取った。さらに大きな羊毛刈り鋏を持ち出し、髪の毛と髭を切りそろえた。ハンスが、あの魔法の香油を自分に塗りつけると、たちまち、美しい若者の姿になった。それから彼は自分の馬車に乗って、花嫁の待つ貴族の館へと向かった。城の主とその娘たちは、馬車から上品な紳士が降りてくるのを見て、目を丸くした。翌日は結婚式だった。姉たちは、末の妹がこんな幸福を手に入れたのを見て、ひどく腹を立てていた。結婚式の夜、ハンスがベッドに入ろうとしていた時、悪魔が窓をノックしてこう言った。

「ハンス、お前はお前の分を手に入れたかい？ 私は二つも手に入れたぞ。」

つまりこういうことだ。姉たちは結婚式が終わると、末の妹の幸福に嫉妬するあまり、彼女の首を絞めて殺してしまっていたのだった。

〔出典：A・ラベナウ「ヴェンドのオリジナルメルヒェン」(Rab)、80〕⁶

36 a. 再び見つけられた妻（抄訳）

昔あるところに、とても貧乏な男がいた。借金取りが彼の家に何度も押しかけていた。貧困が窮地に達すると、彼は縄を買って森へと分け入り、一本のオークの木の下に立った。首を吊ろうとしたのだ。しかしそこで彼が出会ったのは、緑の小人だった。小人は、男が自分の家で最初に生まれ

⁶ A. Rabenau: Originalmärchen der Wenden. In: E. Kühn: Der Spreewald und seine Bewohner. Cottbus 1889. A・ラベナウ「ヴェンドのオリジナルメルヒェン」所収、E・キューン『シュプレーヴァルトとその住人たち』、コトブス、1889年。Rabと略記。

た者をくれると約束するならば、ということで、男に金の毬を一つ提供した。小人は、十六年後にその子供を迎えに来ると言った。

半年後、彼に一人の男の子が生まれた。とても美しく賢かったため、父親は大学に行かせた。息子が自分の身に迫っている事柄を聞き知ると、彼の先生（Meister）が彼に、オークの木の下に行き、テーブルをしつらえ、その上にポット一杯のワインを置くよう助言した。もし誰かがやって来たら、こう言えという。

「神の名の元に行く者は、私の元に来てこのワインを飲まれよ。悪魔の名の元に行くものは、私の傍らを通り過ぎよ。」

まずやって来たのは一連隊の兵隊たちだった。彼らは通り過ぎた。それから第二連隊、第三連隊と兵隊たちがやって来たが、どちらとも通り過ぎていった。すると、黒い馬に引かれた馬車が、それから茶色い馬に引かれた馬車がやって来た。最後に二頭の白馬に引かれた馬車がやって来た。その中から一人の美しい貴婦人が降りてきて、ポットのワインを飲み、その学生を馬車に乗せて行った。

山を越え谷を越え、長い道のりを経て、彼らは美しい城へとたどり着いた。その城の門の前でこの学生は、十二の頭を持ったドラゴンに打ち勝たなければならないのだ。その戦いで乙女が救済され、二人は結婚した。

* * *

若い夫は、両親への郷愁にかられた。彼は若妻と共に、両親のところへと赴いた。しかし両親は彼が自分の息子であることが、もはやわからなくなっている。二人が横になる前に、妻は夫に金の指輪を一つ与え、夜中に自分のことを考えてはならないと言った。この約束を彼は破ってしまったため、朝になると妻は消えていた。

彼は一足の鉄の靴と、「この靴がボロボロになってしまわないうちは、妻と再会することはない」という覚書を見つけることになる。彼は長いことあちこち駆けずり回ったが、彼女を見つけることはできず、馬や馬車も

売り払い、徒歩でもさらに探し回った。

森の中で彼は、マントと鞍をめぐって喧嘩をしている猿と熊に出会う。彼はマントと鞍の両方を獲得し、月へ（記録者注記：あるいは六百歳の隠者の老人のところへ）とたどり着き、ドライベルリン城（Schloss Dreiberlin）への道を尋ねる。彼は太陽へ（記録者注記：あるいは千二百歳の隠者の老人のところへ）とたどり着く。太陽は彼を、彼の名付け親である風（Herrn Wind）（記録者注記：あるいは千八百歳の隠者の老人）のところへ行かせる。風が彼を城へと送り届けると、女主と別の男との結婚式が行われようとしている。彼女は夫の事をようやく思い出し、それを父親に報告する。父親はこの二人の男（夫と新しい花婿）に、失われて再発見されたという鍵の謎解きを課す。二人の花婿は最終的には家へと帰される。 [出典：『ラウジッツ人—娯楽と教訓のための雑誌』（Lzn）、35]⁷

36 b 太鼓たたき

多くの兵士が立っている要塞の中に、太鼓たたきが住んでいた。ある日彼は自分の太鼓を持って、周りを木々に囲まれた大きくて広い要塞墓地へと行った。そこで彼は、三羽の素晴らしく美しい白鳥が、突然墓の上に舞い降りてくるのを見た。白鳥たちは、誰かが近くにいるかどうか、あたりを見回していた。太鼓たたきは一本のハンノキの茂みの陰に身を隠したため、白鳥からは誰も見えなかった。すると白鳥たちはさまざまに、奇妙な身振りをした。その上、白鳥の皮（衣）を脱ぎ捨てたのだ。白鳥が突如として、たいそう見目麗しい乙女の姿へと変身した。ハンノキの陰にいた太鼓たたきは、こんなに美しい少女をいまだかつて見たことがなかったので、

⁷ Lužičan, časopis za zabavu a poučenje [Der Lausitzer. Zeitschrift für Unterhaltung und Belehrung]. Budyšin-Bautzen 1860-1881. 『ラウジッツ人—娯楽と教訓のための雑誌』、パウツェン（ブディシン）、1860-1881年。Lznと略記。ただしこの出典は、同書に併記してあるソルブ語のテキストの出典である。今回使用したドイツ語抄訳は、本書作成にあたって編者ネド自身が手掛けた可能性が高い。

驚きのあまり石のようにカチカチになった。

さて、乙女たちが水浴びをしている間に、彼はそっと忍び寄り、一枚の白鳥の皮を手を取った。それを彼は自分の上着の中に隠し、何が起こるかと待っていた。すると乙女たちは水場から上がってきて、自分の皮を手にした。しかし三番目の乙女は、自分の皮を見つけることができなかった。そこで男が茂みから歩み出てくると、二羽の白鳥はすぐさま空へと舞い上がった。三番目の白鳥は太鼓たたきに請い願った。彼はもちろん皮を彼女に返したいと思いはしたが、自分が皮を持っている事をきっぱりと否定した。その代わりに彼はその女に、自分の身をくるむことができるよう、大きな布を渡した。それから彼は彼女と一緒に町へと行った。そこで二人は長いこと一緒に暮らした。

* * *

男は白鳥の皮を小さな戸棚にしまい込み、その戸棚の鍵を常に、肌はなさず持ち歩いていた。ある日彼は、鍵を戸棚にさしたままにしてしまった。突如として緊急警報が鳴り響き、太鼓たたきは急ぎ駆けつけねばならなかった。彼が扉の外へ出るか出ないかのうちに、彼の妻が戸棚を開き、白鳥の皮を取り出し、窓を開け、その皮をさっと羽織って白鳥の姿になり、そこから飛び立った。しかし飛び立つ前に、彼女は何かを机に書き残していた。

太鼓たたきが帰宅した時には、妻はもういなくなっていた。彼は、机の上に何か書かれているのを見つけた。その文字を読み、自分がある特定の日に、町からほんの数マイル離れたところにある山へと行かねばならないことを知った。自分の太鼓を持って行き、山の周りを三度回って太鼓を鳴らさなければならないということだった。そうすれば、一本の通路が見つかるので、その通路にそって進んで行けというのだ。それから、珍しい花が三つ咲いている鉢植えが見つかるので、その三本の花を手折り、ポケットにつっこんで、山の方へ行くことになるという。その際にまた、三度太

鼓をたたかなければならないということだ。

その期日となり、男は自分の太鼓を携え、山へ向かって歩いた。三度山の周りを回り、さらに三度太鼓をたたいた。すると山が上方から崩れ落ち、その真ん中に深い穴が見えた。すぐさま彼は、その穴の中に這い入った。ほどなくして彼は、通路のところへとやって来た。その中を少し前へ進むと、花が三つ咲いた鉢植えを見つけた。それを彼は手折り、三度太鼓を鳴らした後、這うようにして山の方へと進んでいった。

彼が山を後にするや否や、山は粉々になり、そこに美しい城が出現した。その城の中から、三人の美しい乙女たちが出てきたのだ。それは、魔法をかけられ白鳥にされ、山に閉じ込められた三人の王女たちだった。今や魔法が解かれた。彼女たちを救済したこの男は、その後は彼女たちのところに留まり、自分の要塞に戻りたいと思うことはなかった。

〔出典：「ウェンドのオリジナルメルヘン」(Rab)、133〕⁸

36 c 黒い王女と白い王女

ある町に見張り小屋（歩哨の詰め所）があったが、そこには誰も留まることができなかった。というのもそこには、長い尻尾のとても大きな黒い犬がいつもやって来たからだ。そこで、ある怖いもの知らずの兵士が、弾を充填した銃を手に見張りに立ち、その犬が再びやって来たら、発砲（losschießen）するつもりだった。しかし彼が狙いを定めると、その犬がこう言った。

「打たないで。私は魔法にかけられた王女。舟を一艘こしらえてください。」

兵士が、「お金がない」というと、彼女はこう答えた。

「お金なら手に入るようになります。とにかくこしらえてください。ただし、鳥が巣をかけている幹（Baumstämme）か、巣をかけていた幹だけを使っ

⁸ 注 6 参照のこと。

てください。』

それから彼は言われた通りの舟をこしらえた。必要になると、その都度お金が入ってきた。そして兵士は船出⁹をし、ある島へとたどり着いた。その島には、魔法をかけられた城塞宮殿¹⁰があった。そこに兵士は入って行き、灯りを二つ、さらに本を一冊手に入れた。その本を読むことに没頭しなければならず、しかも一晩中、いかなる方角も見渡してはならなかった。

* * *

十二時間が経過すると、四人の厄介な輩がやって来て、兵士を鞭で打った。しかし兵士はそれに逆らわず、また、わき目もふらなかつた。明け方になり、あの魔法にかけられた王女が来て救ってくれた。彼女は膝のあたりまでがもう白くなっていた。二日目の夜はさらにひどくなった。八人の男がやって来て、彼を殴ったり引っ張ったりした。しかし兵士は本から目を離さず、あたりを見回すこともなかつた。朝になり、あの魔法にかけられた王女がうなずいて謝意を示した。王女は魔法が半分だけ解けており、半分だけ白かつた。つまり、人間の姿になった下半分は白かつたが、上半身はまだ犬のままだった。そして三日目の夜には十二人の厄介者がやって来て、もうこれ以上耐えられないほど兵士をボコボコにした。彼は耐え抜きたかつたが、とうとうあたりを見回してしまった。というわけですべてが水の泡となり、彼は自分の舟で帰還せざるを得なくなり、魔法にかけられた王女は再び犬の姿に戻った。しかしこの犬は、兵士に一足の鉄の靴を渡した。これでもって彼は、再び彼女を救うことができるかもしれないのだ。

さて、兵士は再び自分の部隊へと出頭したが、彼は自分が出かける際に

⁹ ドイツ語のSeeは、男性名詞扱いだと「湖」、女性名詞扱いだと「海」という意味である。ここはauf den Seeとなっているため、「湖」に漕ぎ出したことになる。ここはauf die See、つまり「航海に出た」の間違いではないかとの疑問が残るが、現段階ではどちらともとれるよう、「船出した」という訳語に留めた。

¹⁰ Burg（城塞）という単語の後に、Schloß（城、宮殿）が重ねて記されている。

報告をしていなかったので、投獄されることになった。牢獄の中では、彼の仲間の一人といっしょだった。二人はそこで一つの古い砥石(Schleifstein/Brus)を発見した。まるで鍛冶場にあるような大きな丸い砥石だった。それを使って二人は、来る日も来る日も鉄の靴を磨き続けた。靴の表面が磨き上げられた時、あの王女が舟に乗って到着した。輩たちの姿はなく、たった一人であり、魔法はすっかり解けていた。それから兵士は、一生かけても使いきれないほどのお金を、城の中で見つけたということだ。

〔出典：『伝説、習俗、慣習にみるヴェント人の民族性』（SchVt）、27〕¹¹

【パウル・ネドによる注釈】¹²

34. 名付け親としての死神

これとよく似た版 (Fassung) を、E・フェッケンシュテット (E. Veckenstedt) が『ヴェントの伝説・メルヒェン・迷信的風習』¹³の341頁で、パピッツ (Papitz) の話 (死神) として提供している。そのフェッケンシュテット ^{バージョ}版 (fassung) は、学術雑誌『ソルブの母』¹⁴の1876年17号第6番で、低地ソルブ語 (下ソルブ語) テクスト「二十四番目の名付け親」(Styriadwažasty kmoťr) を公表した、H・ヨルダン (H. Jordan) に由来する。そこから彼のテクストをA・チェルヌイ (A. Černý) が、「ラウジッツ地方ソルブの神話的表象」¹⁵ (所収『ソルブの母』1892年102号79番) に引き継

¹¹ 注4参照のこと。

¹² テクスト：パウル・ネド『ソルブの民話—概説と注釈を施した体系的文献一覧』、ドモヴィナ出版社 (パウツェン)、1956年、382-385頁。

¹³ E. Veckenstedt: Wendische Sagen, Märchen und Abergläubische Gebräuche. Graz 1880. E・フェッケンシュテット『ヴェントの伝説・メルヒェン・迷信的風習』、グラーツ、1880年。Vkstと略記。

¹⁴ Časopis Mačicy Serbskeje (Zeitschrift der „Mačica Serbska“ = „Sorbische Mutter“) . Budyšin-Bautzen 1848-1937. 学術雑誌『ソルブの母』、パウツェン (ブディシン)、184-1937年。ČMSと略記。

いでいる。フェッケンシュテット^{バージョン}版は全体において明瞭さに乏しく、社会批判的な力点¹⁶も欠けているため、ここではシュレーンブルク版を優先させた。

ソルブの^{バージョン}版は、J・ボルテ／G・ポリーフカ『グリム兄弟《子供と家庭のメルヒェン集》注釈書』¹⁷第I巻337頁のKHM¹⁸44(死神)の注釈の中にも複数記載されている。そこで引き合いに出された類話(Variante)のA・チェルヌイ80番は、AT¹⁹327「子供と人食い鬼」に属している。シュレーンブルク版からはとてもよく似たテキストが、ポイケルト(W-E. Peuckert)『シュレーンブルク地方のドイツ・メルヒェン集』²⁰の128頁69番(死神の名付け親)に挙げられている。同じくとても類似したものが、U・ヤーン(Jahn)²¹の『ボンメルンとリュージェンの民間伝説』第1巻61頁10番(死神が名付けた子)に、同様の社会批判的な力点と共に収録されている。とはいえ異なる結末であり、48頁9番(鍵)の導入部も然りである。W・シュタイニッツ(W. Steinitz)が『ドイツ民主共和国における民俗学研究』(Die vorkskundliche Arbeit in der DDR)第1版11頁において、このメルヒェンの民主主義的本

¹⁵ A. Černý: Mythiske bytosće lužiskich Serbow. (Mythische Gestalten der lausitzer Sorben). Časopis Mačicy Serbskeje 1890-1897. Sonderdruck in 2 Bänden 1898. A・チェルヌイ『ラウジッツ地方ソルブの神話的表象』、学術雑誌『ソルブの母』、1890-1897(特別号2巻本、1898年)。

¹⁶ 死は貧富の差なく訪れるという主張と推察される。

¹⁷ J. Bolte/ G. Polívka: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. 5 Bde. Leipzig 1913-32. J・ボルテ／G・ポリーフカ『グリム兄弟《子供と家庭のためのメルヒェン集》注釈書』、全5巻、ライプツィヒ、1913-32年刊行。(以下、ボルテ／ポリーフカ『注釈書』あるいはBPと略記)

¹⁸ Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. グリム兄弟『子供と家庭のメルヒェン集』の略称。初版第1巻刊行1812年、第2巻刊行1815年。そのあとに続く番号は、第7版決定版(1857年)の通し番号。

¹⁹ A. Aarne / S. Thompson: The Types of the Folktale (FFC. 74). Helsinki 1928. A・アールネ／S・トンプソン『民話の話型』(FFC74号)、ヘルシンキ、1928年。ATと略記。

²⁰ W-E. Peuckert: Schlesiens detusche Märchen. In: Schlesisches Volkstum. Bd. 4. Breslau 1932. W・E・ポイケルト『シュレーンブルク地方のドイツ・メルヒェン集』(『シュレーンブルクの民俗』第4巻)、ブレスラウ、1932年。

²¹ U. Jahn: Volksmärchen aus Pommern und Rügen. 1. Teil. Norden und Leipzig 1891. U・ヤーン『ボンメルンとリュージェンの民間伝説』第1巻、ノルデン、ライプツィヒ、1891年。

質を参照するよう指示している。

チェコのメルヒェン——ティレ (Tille) 『チェコのメルヒェン集』第Ⅱ巻第2部95頁²²——でも、貧しい農夫が神と悪魔の申し出を断るが、子供はたったの十人である。スロヴァキアのメルヒェン——ポリーフカ (Polívka) 『スロヴァキアの民話集』第Ⅳ巻241頁²³——では、死神が医術を授けるという根本的モチーフは同じだが、それ以外は、我々 (ソルブ) の版とは大変異なっている。これに反してポーランドの類話——クジジャンフスキー (Krzyżanowski) 『体系的に配置されたポーランド民話』第Ⅱ巻43頁²⁴——は、スロヴァキアの話よりも (ソルブの話と) 酷似している。

この話型については以下を参照のこと。J・ボルテ「死神の名付け親のメルヒェン」(『ドイツ民俗学雑誌』第4号、1894年35頁)²⁵、ポリーフカ編「チェコスロバキア民族学論集」第10号、1904年188頁²⁶、ヴェセルスキー『中世のメルヒェン』、53頁並びに211頁²⁷。

²² V. Tille: Soudpis českých pohádek (Sammlung der tschechischen Märchen);

I. Rozpravy České Akademie Věd a Umění. Tř. III, č. 66. Praha 1929;

II/1. Rozpravy České Akademie Věd a Umění. Tř. III, č. 72. Praha 1934;

II/2. Rozpravy České Akademie Věd a Umění. Tř. III, č. 74. Praha 1937.

V・ティレ『チェコのメルヒェン集』第Ⅰ巻、プラハ、1929年。第Ⅱ巻第1部、プラハ、1934年。第Ⅱ巻第2部、プラハ、1937年。

²³ J. Polívka: Súpis slovenských rozprávok (Sammlung der slowakischen Volksmärchen). 5 Bde. T. Sv. Martin 1923-1931. J・ポリーフカ『スロヴァキアの民話集』全5巻、マルティン、1923-1931年。

²⁴ J. Krzyżanowski: Polska bajka ludowa w układzie systematycznym (Das polnische Volksmärchen in systematischer Anordnung). 1. Bajka zwierzęca (Das Tiermärchen) Warszawa 1947; 2. Baśń magiczna (Das Zaubermärchen) Warszawa 1947. J・クジジャンフスキー『体系的に配置されたポーランド民話』、第Ⅰ巻「動物メルヒェン」、ワルシャワ、1947年。第Ⅱ巻「魔法メルヒェン」、ワルシャワ、1947年。

²⁵ Johannes Bolte: Das Märchen vom Gevatter Tod. In: Karl Weinhold (Hg.): Zeitschrift für deutsche Volkskunde, 4. Jg. Berlin 1894, S.34-41.

²⁶ Jiří Polívka: Národopisný sborník československý, Svazek 10, Praha 1904.

²⁷ Albert Wesselski: Märchen des Mittelalters. Berlin 1925.

35. 悪魔に仕える

「熊皮を着た男」話のこの類話は、「馬鹿者ハンス」話にグループ分けされたフェッケンシュテット『ヴェントの伝説・メルヒェン・迷信的風習』65頁8番として、一言一句一致した状態で出版されている。フェッケンシュテットがこの話を、ラベナウから譲り受けたのだ²⁸。

我々（ソルブ）の類話は、KHM101「熊皮を着た男」と完全に一致している。導入部だけが独自の農民世界に含まれている。ボルテ／ポリーフカ『注釈書』第Ⅱ巻433頁に、このソルブの類話が記されている。我々の近隣からは少しの類話しか提示されていない。ヤーン『ポンメルンとリュージェンの民間伝説』第Ⅰ巻が、ポンメルンの三話を提供している。239頁44番「ガラクタ」²⁹、247頁46番「皮男」、そして373頁の注釈内の「ヴォルフグラムベア」の話³⁰の三話である。

シュレージエンとブランデンブルクの典拠は発見されていない。チェコのメルヒェンの中には個々のモチーフは確かに存在するが、話型としてのメルヒェン資料は発見されなかった。同様の事がスロヴァキアのメルヒェンにも当てはまる（ポリーフカ『民話集』Ⅳ巻122頁の注釈参照のこと）。クジジャンノフスキー『ポーランド民話』第Ⅱ巻52頁で引き合いに出されて

²⁸ ラベナウの「ヴェンドのオリジナルメルヒェン」は1889年刊行であり、フェッケンシュテットの『ヴェントの伝説・メルヒェン・迷信的風習』は1880年に出版されているため、一見するとフェッケンシュテットからラベナウへとテキストが渡ったようであるが、その逆の流れが示唆されている。

²⁹ 低地ドイツ語でHimphanpと記されている。怠け者（Stümpfer）のような人物、ゴチャゴチャな状態（Durcheinander）、ゴロゴロやガタガタとした音（Gerümpel）、駄作（Machwerk）など多様な意味範囲を有する語である。この話の中では、鋼や鉄や火や金と鉄床を使わず鍛造される「物」として登場することから、「ガラクタ」と訳した。

³⁰ 46番の注釈でヤーンは「皮男」話の出典をフェルディナントスホーフ（Ferdinandshof）の口承とし、自分がノイクレンツ（Neuklenz）で聞いた「ヴォルフグラムベアのメルヒェン（das Märchen vom Wolfgrambär）」もこの話に属すると記している。悪魔が与えた灰色の衣で毛むくじゃらに見えたため、主人公の兵士は「ヴォルフグラムベア」と呼ばれるようになる。ちなみにこの名前は、ジークフリートが戦う巨人の名前としても知られる。

いるポーランドの類話にも、我々（ソルブ）の話型とのあからさまな類似は存在しない。ポーランドの複数の類話は常に、KHM100「悪魔の煤だらけの兄弟」とKHM101「熊皮を着た男」をひとまとめにしたモチーフとなっている。これらすべてのことから判明するのは、ソルブの版がKHM101の気ままな模倣であるか、双方に共通する古いドイツ語原話^{バージョン}が存在するのではないかということである。ボルテ／ポリーフカ『注釈書』第Ⅱ巻433頁参照のこと。

36. いなくなつて取り戻された妻の話

A・アールネ／S・トンプソンは、メルヒェン話型番号AT400「失われた妻を探し求める男」のもとに、普通であれば多くの独立したモチーフとして現れる、極めて多様なモチーフを並べ置いている。ソルブのこれらの版は、話の導入部分が決定的である二つのモチーフ・グループに細分化されうる。つまり、悪魔との契約ではじまる話と、白鳥のモチーフではじまるものとである。

36 a. 再び見つけ出された妻（抄訳）

M・ルーラ（M. Róla）によって書き留められたメルヒェンが、一度だけ確認されている。この話は明らかにKHM92「金の山の王さま」に属するが、ボルテ／ポリーフカ『注釈書』にはそれが示されていない。

同系統のポンメルンのメルヒェンとしては、ヤーン『民間伝説』第Ⅰ巻281頁54番（マレナ）³¹、298頁55番（深谷の王女）、さらに312頁57番（金の太陽の城）が挙げられる。ポイケルトによるシュレージエンのメルヒェンでは、132頁73番（金のバラ園ノイラント）だけが、我々（ソルブ）の

³¹ マレナ（Maräne）は、北ドイツの湖沼などに生息するサケ科 Coregonus 属のいくつかの種（淡水魚）。特に「小さいマレナ」Kleine Maräne（Coregonus albula）は、フィンランドでは Muikku と呼ばれるおいしい白身魚の一つ。

メルヒェンとのある種の類似性を示している。

チェコのメルヒェンでは、ティレ『メルヒェン集』第Ⅱ巻第1部357頁に、同じモチーフ水準を有する七つのメルヒェンが存在する。それらは、ソルブのメルヒェンが直接的な模倣なのではないかというまでもなく、我々のメルヒェンに極めて酷似している。スロヴァキアのメルヒェンとしては、我々のモチーフ水準によく似た資料——ポリーフカ『民話集』第Ⅱ巻115頁——が、たった一話挙がるのみである。この話型に属するポーランドのメルヒェンを、クジジャンフスキーの『民話集』第Ⅱ巻61頁が、四グループに分類している。その多くは、導入部に白鳥のモチーフを有している。ここでは他にも、モチーフの少なからぬ混和が起こっていた。

36 b. 太鼓たたき

このメルヒェンは、フェッケンシュテットの資料の120頁でも公表された。ラベナウ「メルヒェン集」の83頁が、白鳥王女をめぐる話をさらに提供している。その話では一人の狩人の若者が、王女を救済すると白鳥に誓いを立てるのである。ところが彼は、彼女の美しさを裏切り（漏らし）、教会に行くことを一度ためらう。そのため彼は王女を探すこととなり、粉ひきが若者に、黄金の雄のノロジカを貸し与える。そのノロジカが彼を、ガラスの山へと導く。しかし彼は魔法のかかった泉の水を飲み、「暗黒の国」で王女を探さなければならなくなる。小麦粉の樽の中で彼は怪鳥グライフのところまで到達し、苦悩の三夜を経て、王女を救済するのである（フェッケンシュテットの122頁で活字化されている。このメルヒェンはほぼ生粋ではなく、すでにボルテ／ポリーフカ『注釈書』第Ⅱ巻325頁が、ヴォルフの『家庭のメルヒェン』³²の217頁との一致を挙げている）。白鳥の乙女のモチーフとしてフェッケンシュテットは、119頁 1番と125頁 4番に、

³² Johann Wilhelm Wolf: Deutsche Hausmärchen. Göttingen/Leipzig 1851. ヨハネス・W・ヴォルフ『ドイツの家庭のメルヒェン』ゲッティンゲン／ライプツィヒ、1851年。

さらなる物語を提供している。前者はメルヒェンの残滓に過ぎないが、後者の方は、ラベナウが伝えた版^{バージョン}の数少ない類話である。フェッケンシュテット253頁（湖の乙女）に、このメルヒェンの残滓がさらに存在することを、ここに記しておく。最終的に、シューレンブルク『シュプレーの森』（1880年）³³の77頁の話（牧童と三羽の白鳥）が指摘され、シューレンブルク『ブランデンブルク州の地域研究』第Ⅲ巻『民俗学』234頁7番³⁴で復刻されている。ここでは牧童が、魔法にかけられた三羽の白鳥によって、湖の中へとおびき寄せられる。地下世界で彼の前に三人の老女が現れ、その中の一番醜い女と彼は結婚しなければならぬ。彼はそれを断り、地上に帰りたいと願うのだが、白鳥の乙女たちへの憧憬ゆえに憔悴して死んでしまうのである。

我々（ソルブ）のメルヒェンは、KHM193「太鼓たたき」と同系の話である。ボルテ／ポリーフカ『注釈書』第Ⅲ巻411頁で、それが記されている。しかし、一致は最初の部分だけであり、ソルブのメルヒェンはさらなる経過において、独自のモチーフをたどる。シュレージエンの「白鳥の王女」——ポイケルト『メルヒェン集』137頁——は、我々の版^{バージョン}との関係性はほとんどない。チェコのメルヒェン——ティレ『メルヒェン集』第Ⅱ巻第1部371頁とFFC34号³⁵の124頁——に、個々の点から見てKHM193に相応する話がいくつか見つかっているが、そこには太鼓たたきのモチーフはない。チェコとスロヴァキアのメルヒェンは、唯一ボルテ／ポリーフカ『注釈書』第Ⅲ巻410頁に示されているが、ソルブのとても単純な版^{バージョン}との共通性には乏しい。『ヤン・マチャロフ教授70歳誕生日（1855-1925）に捧げる

³³ W. v. Schulenberg: Wendische Volkssagen und Gebräuche aus dem Spreewald. Leipzig 1880. W・フォン・シューレンブルク『シュプレーの森にみるヴェントの民間伝説と風習』、ライプツィヒ、1880年。SchVsと略記。

³⁴ Ernst Friedel und Robert Mielke (herg.): Landeskunde der Provinz Brandenburg. 5 Bde. Berlin 1909. Schulenberg: Bd.3. Volkskunde 3. Bd. Berlin 1912.

³⁵ V. Tille: Verzeichnis der böhmischen Märchen (FFC 34). Porvoo 1921. V・ティレ『ペーメンのメルヒェン目録』（FFC34）、ポルヴォー、1921年。

記念論集』所収のティレ「鳥少女」(divky ptáci) を参照のこと³⁶。クジジャーノフスキーの第Ⅱ巻61頁が、導入部に白鳥モチーフを有するポーランドのメルヒェン十一話を示している。

36 c. 黒い王女と白い王女

本書でシューレンブルクが報告した^{バージョン}版は、明らかに大きな崩壊現象を示している。魔法による犬への変身は、動物花婿メルヒェンによって知られている。ボルテ／ポリーフカ『注釈書』第Ⅱ巻229-271頁、KHM88「歌って跳ねるひばり」への注釈における例を参照のこと。しかし、導入部分は明らかに語り手の付け加えである。我々（ソルブ）の話型にはさらに、苦悩の夜ごとのモチーフと鉄の靴のモチーフが加わっている。しかし、砥石による靴の研磨はまったくもって稀有であり、メルヒェンらしいとは言えない。

【付記】

当該書の翻訳に関しては、ソルブ研究所（パウツェン所在）のアネット・ブレザン氏を介し、ディートリヒ・ショルツェ氏より1998年6月8日付で許可されていることを付言しておく。

³⁶ V. Tille: divky ptáci. In: Jiří Horák (hg.): Sborník prací věnovaných professoru dru. Janu Máchalovi k sedmdesátým narozeninám 1855-1925, Praha 1925, 312ff. ティレ「鳥少女」、所収ユジ・ホジャック（編）『ヤン・マチャロフ教授70歳誕生日（1855-1925）に捧げる記念論集』、プラハ、1925年、321頁以降。